

生研第22066号

令和4年12月2日

校長・准校長 様

生物科 様

大阪府高等学校生物教育研究会
会長 柴原 信彦

令和4年度大阪府高等学校生物教育研究会
第1回学術講演会について（ご案内）

貴殿ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は本研究会の活動にご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、令和3年度大阪コミュニティー財団大阪府教員研修のための梶本基金助成による、大阪府高等学校生物教育研究会主催の第1回学術講演会を下記のとおり開催いたします。

ご多忙のこととは存じますが、よろしければご出席くださいますようお願いいたします。

記

1. 日時： 令和5年2月24日（金） 午後3時00分～5時00分
2. 場所： ホテルアウィーナ大阪 3階 信貴の間
（大阪府大阪市天王寺区石ケ辻町19-12）
（近鉄 上本町駅から徒歩約400m）
3. 内容： 講演題目「湖沼生態系は動的循環平衡の総体で機能する」
ーファクト情報が環境観を醸成するー
講師 滋賀県立大学名誉教授 三田村 緒佐武 氏
4. 参加者： 生物科・農業科・工科教員・実習教員（約45名）

Covid-19感染症予防対策のため、事前登録制といたします。

参加をご希望される先生は下記のQRコードから申し込みください。QRコードの読み取りができない場合は、下記連絡先、本部事務局の岡本宛にメールで「第1回学術講演会参加希望」、「メールアドレス」、「学校名」、「名前」を記入し、申し込み願います。（ネット申し込み頂けるとこちらの業務の効率化が図れるため非常に助かります）



〈連絡先〉

大阪府高等学校生物教育研究会事務局
（府立事務局）大阪府立泉陽高等学校
理科 加藤 励

TEL：072-233-0588 FAX：072-233-6645

E-mail：reikt1974@gmail.com

（本部事務局）大阪教育大学附属高等学校池田校舎
生物科 岡本 元達

TEL：072-761-8473 FAX：072-762-1076

E-mail：gentatsu0311@gmail.com

○講師 滋賀県立大学名誉教授 三田村 緒佐武 先生

○講演テーマ・要旨

『湖沼生態系は動的循環平衡の総体で機能するーファクト情報が環境観を醸成するー』

講演会の話題は、次の二つに大別できる。一つは、水系は三次元的に連続している。私たちが、今観察する水域の生態学的景観は、過去のからの産物である。隣接する陸圏、水圏、大気圏、さらに生物圏の影響を受ける水域生態系は、動的に循環して機能する四次元世界である。講演では、

「私がなぜ水圏の窒素循環を研究することになったのか」の研究史と、「自然は時空間が連続する動的平衡の総体である」と理解したことを述べる。

二つは、今観察する水域生態系の構造と機能を正しく理解するためには、観察者の自然観に基づく測定が科学的に事実であることが要求される。今を生きる人の多くは、人から自然を診る目を学習してきたため、自然から己の存在意義を確認する作業が希薄である。講演では、「ブックレットをなぜ出版したのか」を力説し、研究者から学者に進化できなかった内省を「誰もが陥る勘違いの水環境調査とは」として話題提供したい。教育研究機関と行政機関の研究者の多くが勘違いと間違いに陥る環境観察と測定を正す方法を紹介する。より良い環境を創造する学徒の指針でもある。

陸水学と環境学を研究していた演者は、研究者から「何人からの影響をも受けずに真実を発現し、命を捧げて生涯を生きる」学者に進化したく、学者の資質「誰のための研究か。何のための研究か」に悩んでいた。退職後、誰を万物から人と考え、水環境を学び実践している住民グループに加わった。そのとき、住民のみならず、科学的事実を発信する責務がある研究者も、水環境を診る目が近視眼的自己中心主義であり、勘違いと間違いを反省しない前例主義・公称主義が原因で失敗を続けていることが判った。この勘違いと間違いは、私の研究生活で柔軟性が欠如するデジタル思考により論文などを発信してきた研究史とも重なる。

河川湖沼などで生息・生育する水生生物とその環境を理解するための基礎項目（水系特性、透明度、水温、電気伝導度、pH、溶存酸素、栄養塩、CODなど）の測定で陥りやすい勘違いと失敗の原因を紹介し、正しい環境調査から水域生態系を再生させる基点を述べたい。さらに、参加者の許しが得られれば、自然を分割思考する生物学などをなぜ学ぶのか、生物教育とは何かを素人演者の論も述べたい。

環境を学ぶ目的の一つは、現環境の調査から、自然環境と人為改変環境の違いを理解して、自然が望む環境を創造することにある。生活負荷が環境を悪化させたときは、これを修復・復元して自然が望む環境に再生させる環境賢人に進化するための学習でもある。さらに、この環境学習の最終目標を、あるべき自然を現世代が享受するだけでなく、次世代に継承するためとしたい。勘違いと過ちは誰もが陥る。学徒は、対象環境の総体を動的に診る視点を修得することが求められる。不確かな知識でも、しばし立ちとどまって、学習意義を理解したのちに行動しなければならない。

自然生態系との共生生活を切望する者が本講演を深く聴けば、新型コロナウイルス感染症が私たちに何を語っているのかも気づくだろう。

○講師略歴

学位 理学博士（名古屋大学）

最終学歴 名古屋大学大学院理学研究科博士課程退学

職歴 大阪教育大学助手、同講師、同助教授、滋賀県立大学教授、滋賀大学教授、滋賀県立大学名誉教授

専門分野 生物地球化学、陸水環境学、水環境教育

所属学会歴 日本陸水学会、日本水環境学会、日本海洋学会、日本生態学会、日本環境教育学会